西洋耽溺交流（下）

～洗浄編～

～体験版～

鬼灯が目覚めたとき目の中に入ってきた光景は、定点照明の部分だけがぼんやりと浮かぶ、ほの暗い天井だった。
工場を思わせる無機質な壁に、コードの束が無数にねじくれ、用途不明の設備を備えた鉄の箱から数々のアームが垂れ下がっている。
そして、上から自分を見下ろす銀髪の男。

「お目覚めですか～？」

明るい声で話しかけられ、反射的に殴ろうと腕に力を込めたが、思わぬ抵抗を感じた。自分の四肢で試みてみると、どうやら拘束されている。しかも、身にまとっているものは何もないらしい。

「くっ・・・これはなんですか、すぐに解放してください」

力を込めて拘束を振りほどこうとするが、まるでビクともしない。腕も足も曲げられるほど余裕があるが、どう足掻いても足首、手首は動かすことができなかった。
それもそのはず、捕まえられている部分はゴム質で囲われ、土台がステレスのように硬い素材で地面に埋められ手入る。

まるで、舗装された地面から両腕が出ているという奇妙な姿にされていたからだ。

これでは拘束を解くことはできない。何より、いつもの怪力が出せず、鬼灯は若干焦りを覚えていた。

「全く、勝手にお部屋から出たと思ったら、あんな下級悪魔たちにドールの刻印を刻み付けられちゃって、ほーんと困ったお客さんですね！あなた！」

カールした長い銀髪を揺らしながら頭の隣にしゃがみ、鬼灯の鼻を抓みながらため息交じりに言う。

「んぐっ・・・！やめなさい！そっちこそ、助けに入るのが遅いんじゃないですか・・・？監視カメラが設置されていないなんて、言わせませんよ・・・」

「んー、確かに監視カメラは設置していますが・・・それをチェックする子たちを誘惑しやがったのはどこの誰でしょうね？」

「誘惑などしていません。こちらは一方的に被害をこうむったんです」

「ふーん、一方的ねえ・・・それにしては、随分お楽しみだったご様子ですけど？」

そう言うと、銀髪の悪魔アスモデウスはカメラの画面を鬼灯の前に突き出した。

画面には、数人の男たちの円の中でめちゃくちゃに犯されている白い裸体。

『おら、いいか？いいって言えよ・・・』

『んはぁ、いい、いいっ・・・ですっ・・・！』

『はは、よし、言えたご褒美だ』

『ああっ！それはしないと・・・！』

鬼灯は顔をしかめ、画面から目を逸らした。自分が凌辱されている場面を見せつけられるなど、屈辱だった。

「この者たちを、処罰してください・・・！」

「言われなくとも、もうしましたよ～。彼らは人間から堕落して悪魔になった子たちですから、殺してとっとと審判に差出してやりました。人の魂としてまたこちらの地獄に戻ってくるでしょうが、生前やった罪の重さから、かなーり辛い目に合わなきゃいけないでしょうね～」

本人は太陽の日の元のように明るい口調で言っているが、簡単に「殺す」などと言う部分に、悪魔の非情さを感じる。

「でもねぇ～。そのドールの刻印だけは消せないんですよね～」

そう言って、アスモデウスは大げさに天を仰ぎ、わざとらしく嘆いた。

鬼灯の白い胸、両の鎖骨の間にある、一遍三センチほどの紅い三角の刻印。

それは悪魔専属の性奴隷になったことを意味し、主人になった悪魔には逆らえず、触られれば即発情という、屈辱的な契約だった。

淫魔たちの饗宴から逃げ出して、庭の警備をしている下級悪魔たちに捕まり、淫らな数々の拷問をほどこされ、挙句にこのような仕打ちを受けてしまった。

日本地獄ＮＯ２という、高位に位置する鬼灯へこのような屈辱的な行為が成ってしまった事は、国際問題に発展してもおかしくない。

「これ、解除できないんですか？もう契約の主はいないんでしょう？」

「うーん、解除できないこともないんですが・・・難しいんですよね。本当はあんな下級悪魔のヤツらが成功できる儀式じゃないんですよ。よっぽど契約の相手が望まない限り・・・」

そう言って、アスモデウスは鬼灯の裸の身体を盗み見る。
その視線に悪意を感じた鬼灯は、眉を吊り上げて激しく言った。

「望んでなどいません！私は被害者です！これ、なんですか？とっとと拘束を解いて、自由にしてください！」

苛立った声でまくしたてる鬼灯を尻目に、アスモデウスはデジカメの画面を楽しげに視聴している。

「ホオズキさん、あなた、何回イキました？」

「・・・・・っ、そんなの、覚えていません・・・」

急激に下級悪魔たちに嬲られた一場面がフラッシュバックし、鬼灯はその記憶をもみ消すよう、忌々しげに首を左右に振った。

「解除方法はそこにかかってるんですよね～。後でちゃんとブエルと相談して処置しますから、とりあえずおとなしくしといてください」

「後でって・・・」

悠長な物言いに鬼灯は徐々に怒りを募らせつつあった。自分をこんな目に合わせたくせに、詫びの一つもないのも癪に障る。
それどころか、いかにもこちらの落ち度かのように扱われ、その理不尽さに苛立ちが蓄積されてゆく。

「とりあえず、今はその汚しまくったお体を洗浄しないといけないですね！あーあ、下級悪魔のザーメンで超くっさ！」

「くっ・・・、だまりなさい・・・」

アデスが指摘したとおり、裸の鬼灯の身体には無数の精液が付着している。
もう付着と言うよりも、精液のシャワーを全身に浴びたと表現したほうが等しく、その量は尋常ではなかった。
男悪魔たちの発射した不浄の淫液は鬼灯の優雅な鼻孔をくすぐり、その濁った臭いで息が詰まりそうになる。

「これから自動洗浄でピッカピカに磨いてさしあげますからね～。一メートル１５分、１０メートルのレーンになっていて、一メートル進むごとに洗い方が変わりますから、１０通りの洗い方で、しっかり汚れを落とせますよ！」

「・・・普通に風呂で身体を洗いたいですねっ・・・」

「ノーノー！そんな洗い方じゃ、身体の皮膚にまで染み渡ったザーメンは流れてくれませんよ？このブエルが開発した洗浄機で、しっかり、根こそぎ、ゴッソリと！洗わせていただきます・・・と、その前に・・・」

アデスは急に言葉を切り、長髪を華麗に揺らしながらしゃがみこむと、痛々しくも大きく開脚された鬼灯の中心へと目をむけた。
下級悪魔たちによって散々嬲られ、魂が削れそうなほど射精させられたそこは、忌まわしい禁呪のせいで、刺激を受けていない今も力を持ち続けている。

アデスには当然言う必要はないが、鬼灯の今の身体は、目覚めてからすぐに下半身が疼きはじめている。誰かに触ってほしくてたまらない状態に陥っていて、腰が揺れそうになるのを水面下で必死でおさえていた。

「ふふん、なかなかお見事な逸品で・・・」

そう言って面白そうにジロジロと眺められ、鬼灯は羞恥で怒りを覚えてしまう。

「見ないでください、失礼ですよっ・・・」

「こんなにガバっと両足おっぴろげて、なーにいっちゃってんですか・・・ほらっ」

「っ！」

アデスが白い手袋をした指を一本立て、反り返っている鬼灯自身の根元からくびれまでを軽く撫で上げた。

その途端鬼灯の目の前に電流が走り、腰にズン・・・と重さを持った快楽が押し寄せて、下半身全体が激しく痙攣するのを感じ取った。

「あっ・・・・ぐっ・・・・！」

泣き叫びたいほどの激感が中心を襲い、無様なうめき声だけしか出すことができず、鬼灯はその場で悶絶するしかなかった。

「あれあれ、元気～」

「！？」

視界が戻り、目が見えるようになってすぐ、自らの下半身を確認する。

（そんな、達して・・・いる・・・）

鬼灯の胸と下腹に、暖かい感触がある。
一瞬でアデスに射精させられたのだと理解した鬼灯は、絶頂の瞬間を見られた羞恥と、手品のように達せられた不安に襲われた。

「はい、ちょん。」

「・・・・っ」

また先ほどのようにあっという間にイカされると覚悟していたが、感じたのは先端のごくわずかな圧迫感だけだった。

「身体を洗っている間にビュービュー出しちゃったら、洗う意味がないでしょ？だから、ＥＵの超魔導科学で、ザーメンは別次元へ飛ばしちゃいます」

「そんな芸当が・・・」

出来るはずない、と鬼灯が言い終わらない内に、再び一本の指が自身を軽くなぞり、鬼灯は怒涛のような愉悦に襲われて声をあげた。

「あああっ！」

再び視界が白くなるほどの激感。
快感と呼ぶには弱く、まるで灼けつくような峻烈さと純粋な喜悦に、理性も、本能すらも吹き飛んでしまう。

手袋をした指一本で軽く撫でられただけで、これほどの快楽が走るのだ。もし本気でアデスに愛撫されてしまったら、正気を保てなくなるかもしれない・・・
など、今の鬼灯には考える余裕すらなかった。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・」

立て続けに強烈な射精をし、息を乱している鬼灯に、下半身を見るようアデスは促した。

「・・・・・」

確かに射精絶頂した感覚はあったのに、新たに汚れている部分はなさそうだ。肌で感じる感覚でも、新しい飛沫が肌にかけられた気配は察知できない。
さきほど施された奇妙な施術だったが、最初はあった圧迫感もいつの間にかなくなり、今は無感覚の状態だった。

「成功かくにん～。では、お体さっさと洗っちゃいましょうね！」

アデスは立ち上がり、壁に添えつけられたレバーを手に取ると、無慈悲なスイッチ音とともに鬼灯の身体へガクン、と振動が伝わった。

「じゃ、二時間半、しっかり洗われてくださいね～」

鬼灯を大の字で拘束した地面が、上へ上へと進んでゆく。
頭上を見ると、そこには四方を小さく取り囲む無機質な箱。

～中略～

途中で空気を含んだレーザー水は凶悪で、敏感な胸の突起を強かに連続で乱打するような仕様となり、鬼灯の性感を容赦なく追い詰めてゆく。

「んぐっ！あああ、だめだ、止め、止めっ・・・！」

両胸にも絶頂の快楽がどんどん蓄積し、強烈な愛撫にとうとう胸部でも絶頂を迎えてしまう。

「んあぁぁあーーー！」

（た、たまらない！たかがシャワーなのに、こんな、あ、あり得ない・・・！）

困惑する鬼灯をよそに、間髪入れず激しいレーザー水が鬼灯自身を打ち、感じやすいくびれに向かってレーザー水が三方向から一斉に発射される。

快感の逃げ場を遮断され、最も敏感な性感帯を徹底的に責めれるという、壮絶な激感だ。

一気に訪れた圧倒的な激感に、鬼灯は達精の愉悦どころか、息つく間もなく無意識に射精絶頂を極めてしまっていた。

「うあ、あっ！あっ！ああーーーーーー！」

鬼灯の切ない嬌声が、狭いボックスの中で響き渡る。しかし、その声を聞く者はおらず、天井に張り付けられた大映しの鏡が鬼灯のはしたない艶姿をただ無慈悲に映し出している。

あまりの快感の連続に鬼灯の目端から涙がこぼれ、精一杯叫び声をあげる小さな口は、限界まで広げられていた。

自身に与えられる快感も止まらない。
射精すれば落ち着くはずの射精絶頂が、刺激を与えられている間ずっと続いている感覚なのだ。

激烈な快感を浴び続けている鬼灯には気付く由もなかったが、自身の快感が継続し続けるのはアデスに施された魔導術が原因だった。射精した精液は別次元へ飛ばされるが、射精した分、快感は残り続ける。
まさに悪魔の責め具にふさわしい淫栓だった。

ビシュビシュ、ピシュー・・・

「あぁぁ・・・っ！また、ああ、と、止まらないっ・・・！」

腰を捻らせて放水から逃れようとするが、当然マーキングされたかのようにコードは蠢いて焦点を全くズラさない。

それどころか、喪失した床の空間からベルトが伸び、鬼灯の柳腰を固定してしまった。

止まらない快感に身体を悶絶させている鬼灯だったが、レーザー水が前だけでなく、尾てい骨をどんどん下がり、秘孔へ到達するのを感じてしまった。

なぞられただけでゾゾゾ、と涎が出そうな快感がせりあがり、これから施される快感を考えただけで絶望と、胸の高鳴りを感じてしまう。
常人がこの責めを受ければ場合によっては廃人かもしれないが、
これまでの調教と尋常ならざる体力を持つ鬼灯の身体は快感の限界を底上げされ、大概の責めには耐えられるようになってしまっていた。
意識を失った方がよほど楽なのだが、激烈な責めと、鬼灯の快感を欲する貪欲な身体がそれを許さない。

水の勢いはとうとう秘孔におよび、数本のコードが伸びて、そこを集中的に責め始めた。

「あぐっ！あぁぁっ！うぐ、あぁあ、あああああ！」

鬼灯の悲痛な悦楽の声が上がる。
入り口だけでも十分感じまくる秘められた部分を攻撃されて、拘束された腰が大きく反りかえる。
洞内へ侵入しそうな勢いで放出される高圧力の水流は、鬼灯が最後に意識を失うまでに散々嬲られた箇所で、一度収まったものの、刺激されることで再び、あの峻烈な快感を思い出してしまう。

自身も容赦なく多角方面からシャワーやレーザー水で責められ、絶頂から降りられない。

「くあっ！あっ！あぁぁぁぁあああ！」

ビシュビシュと強力な水音が箱の中で響き渡り、水圧が鬼灯の桃尻をゆがませる。

「うぁ、あ、あぁぁ・・・」

自身への責めが中断され、ようやく射精絶頂から下ろされた安堵で鬼灯の前身が弛緩する。
しかし、ある角度から秘孔を責めたレーザー水が、緊張が解けたせいで、閉じきっていた鬼灯のそこへ侵入することを果たしてしまった。

「んぎっ！ああ！あぁぁぁあああ！だめえええ！」

背中を限界まで反り返らせて、秘孔に連続して与えられる激感に鬼灯が叫び声を上げる。
一本だけ入り込んだホース水に続いて、二本、三本と続き、さまざまな角度から超敏感な内壁を打ちたたいた。

「あっ！あっ！あっ！あぁぁああ！」

鬼灯の腰がガクガクと揺れ、何度も上下運動を繰り返すが、当然狙いすました場所は外さない。
普通の性交では得られない激悦に翻弄され、鬼灯はすでに、快楽で息も絶え絶えにさせられていた。
しかし、何も考えない機械は残酷だ。
鬼灯の身体に追い打ちをかけるべく、一本のコードが妖しげな動きをする。

集中責めをされている鬼灯自身の上に伸びると、先端がキュウとすぼまり、ごく細い水を、かなりの勢いで放出した。

「あぐうぅぅっ！あああっ！あああああああ！」

レーザー水のたどり着いた先は鬼灯自身の鈴口だ。
感じやすい性感帯である場所の最も敏感な箇所を強烈に責められ、さしもの鬼灯も叫び声をあげるしかできない。

尿道を洗浄しようとしているのか、本来出すべき穴に水流を打ちこまんと、先端に近づいたり遠ざかったりして、位置を調整している。
しかしその行為は、鬼灯に緩急をつけた愛撫をするのと同等で、ますます激しく悶絶させる結果になる。

自身への責めだけでなく、後ろへの責めも苛烈さを増した。
コードの一本が秘孔に近づき、強烈な水流のまま、その秘めた入り口に頭をめり込ませた。

「うあああああ！」

散々下級悪魔たちに中だしされた洞内は、特に洗浄の対象にされているらしく、レーザー状だった水流はシャワー状に変化し、内壁を余すところなく水流で洗い流す。
だが、水圧はレーザー水の時となんらかわらない。
強烈すぎる快感を前立腺に受け、鬼灯はあえなく後悦絶頂に到達してしまった。

（これたまらない、もう絶頂が、止まらない、んんんっ！頭、真っ白になるっ・・・！）

声すらまともに出せず、口から切なげな吐息を出し、時折絶頂の断末魔をあげる。

両胸も相変わらずシャワーやレーザー水に責められ、何度も絶頂を迎えていた。

風呂場で事に及んで絶頂させられたことは数知れずあるが、機械による洗浄でここまで激しく凌辱されたことなど、長く生きている鬼灯には初めての体験だった。
そのため、快感や感覚を堪える術も探ることができず、ただただ与えらえ続ける激悦を貪りつくすだけだった。

「んぐうぅぅ！あああ、あああああ！」

身体中で弾ける度外れた絶頂に次ぐ絶頂に、鬼灯の理性は吹き飛ぼうとしていた。

～中略～

大きく開脚され、拘束された鬼灯には、抗うすべはない。
そのまま中心の間を伝い、生暖かいスライムが身体を媚薬で浸食しながら通過し、恐れていた秘孔の入り口へとたどり着く。

いきなり太さの張る大きさを突き込むのではなく、人間の指一本ほどの細さになり、そのヌルヌルの身体を生かして難なく狭い入口へと侵入を果たしてゆく。

「あぁぁぁぁ・・・・っ！」

そして都合の悪いことに、鬼灯の身に訪れたのは嫌悪ではなく、ただ快感だけだった。

中でスライムがどんどん洞内へ侵入してゆくが、挿入された瞬間、一瞬気が遠くなるほどの愉悦を感じてしまった。

（こ、こんな、熱い、中が、あぁ灼けそうです・・・！）

熱い、と思わなければ溺れてしまいそうな快感だった。

入り込んだ一本は鬼灯の体内を縦横無尽に動き回る。
敏感な内壁をヌルヌルと擦り、捩じる様に深く突き入れたと思うと、一気に頭が出ない程度まで大胆に引き抜かれる。
その感覚に腰が自動的に跳ね上がり、小さな口から声が途切れる事がない。

「あぁっ、あっ、あぁぁあ、はぁ、う、動くなぁっ！ああ！」

後ろを責められている間にも、自身への責めは当然止まっていない。
三本のスライムが舌のように平べったい形状に変形し、それぞれが交互に下から上へと連続で舐め上げていく。

「ぅあっ！あっ！はぁぁぁ！」

自身の快感に囚われると、下半身が緊張して洞内を強く締め付けてしまう。
中のスライムが圧力で変形するが、そこはスライムなので、己の形が変わっても何の問題もない。変わらず上下に動き続け、挿出を繰り返す。

その間に舌状のスライムが自身への責めを激しくし、鬼灯を絶頂させるべく執拗に嬲り続ける。
敏感極まる器官を、恐ろしくヌルヌルした長い舌で交互に、絶え間なく舐め上げられるという普通の性交ではありえない状態に、さすがの鬼灯も成す術もなく翻弄される。

（うぁっ・・・熱い、何か、注入されている・・・？）

侵入したスライムの全身から、明らかに液体があふれている感覚がある。
液体は腸壁に沁み込み、そこから悪寒がするほどの渇望感と愉悦がわきあがって、鬼灯の腰を小さく跳ねさせる。

（び、媚薬・・・かっ・・・）

液体を放出されるたびに体内が熱く、肌の温度も上がって、吐く息も熱くなってくる。
体内のスライムは液体を注入することに専念しているらしく、しばらく動きを止めている。
しかし、自身を弄ばれている鬼灯が身悶えると、腰の動きにつれて内壁が揺れ、スライムに擦れる。
その瞬間、涎が出そうなほどの強烈な快感がこみ上げてきた。

「あぐっ・・・・！」

あまりの愉悦に、苦悶に似た声をあげてしまう。
この快楽は危険だ、と鬼灯の理性が警告を鳴らし、なるべく身体の動きを止めようとするが、こんな時に限って腰の拘束は外され、唯一自由に動かせる部分になってしまう。

（動かない、絶対に動かなっ・・・）

「ふあぁぁっ・・・・・！」

そう決めた直後、中のスライムがわずかに動き、一斉に擦られた洞内に快感の電流が流れ出す。
ビクビクと腰が痙攣するのを止められず、意識しなくても入り口や中を強弱をつけて締め付けてしまっているのがわかる。

それを止めないと快感が終わらないというのに、身体は鬼灯を裏切り、収縮活動を止めようとはしなかった。

「はぁ、はあ、はぁ、ぐっ・・・止まれっ・・・！」

大きく息をつき、強靭な精神力でなんとか身体を律することに成功し、身体の痙攣を止めた。しかし、次に襲ってきたのは、予想外の期待感だった。

強烈な媚薬を染み込まされた内壁が、刺激を欲しがって激しく疼き始めている。
さきほどのように、スライムで擦ってほしいと、望まない欲求が波のように押し寄せ、鬼灯の理性を押し流そうとする。

（そんな・・・私の身体、どうにかしてほしくて、疼いているのか・・・）

鬼灯の意思を見透かしたかのように、体内のスライムがズルリと引き抜く動きを見せる。

「はぐっ！」

ビク、と鬼灯の身体が跳ね上がり、突然与えらえた極上の快感に声をあげてしまう。
しかし、腰を突き上げると責められている自身がさらに標的にされ、舌スライムでの連続攻撃を受けることになる。

「ふぁぁっ！くっ・・・！んんっ・・・あぁぁぁ・・・！」

（イク、達してしま・・・ぅぅ・・・！）

～中略～

『さっきのビリビリは、苦痛も与えちゃいますけれど、それと同時に神経に直接作用して、より快感を強く感じるようにできちゃうんですよね～。媚薬では限界がありますから。まあ、こうやって、直接神経をいじくっちゃって、もっとエロい身体にしちゃったってことですよー』

「全く、下らない・・・そんな事、できるわけがっ・・・」

先端に羽毛繊維が付いた用具が、鬼灯の下腹から両胸の間をスッとなぞった。

「いやっ、あっ、あぁ、ぁぁぁ・・・っ！」

突如口の端から涎が出そうな愉悦がこみ上げ、鬼灯の白い喉から快感の喘ぎがこぼれてしまう。
その快感は、押さえようとしても押さえられるようなものではなかった。

（な、なんだ今の感覚は？快感が・・・熱が抑えられない・・・！）

『だから言ったでしょー。神経を直接いじくって、快感をもーっと激しく感じるようにしたって～』

その声から、にやにやとしたアデスの笑みを想像できるのが忌々しい。

「あっ、あぁぁっ！」

柔らかい繊毛を取り付けた器具に首筋を撫でられ、たったそれだけで足指の先までに電流が走る。
新たに施された術のせいで、鬼灯の身体はもう一段淫らに変貌を遂げてしまったらしい。

これまで感じていた快感は、今感じている感覚とは比べ物にならず鋭く、鬼灯の心まで浸食するのか、
快感に対する期待感まで大きく膨らんで、身体が熱く疼き始める。

（これ、ちょっとヤバいかも・・・しれませんね・・・っ）

身体で感じる快感の強力さに、さすがの鬼灯も危機感を覚える。
しかし、鬼灯の身体の仕組みの変貌などに気付かず、責める器具は再び牙をむき始めた。

「あああぁぁぁ！ああっ！あああぁぁぁあっ！」

縦長のモップ状の器具が上半身を縦横無尽に撫でまし、その感覚だけで鬼灯は艶の乗った声をあげてしまう。
さらにT字で脇腹を擦られ、胸の突起を球繊毛で擦られ、体中のあちこちで快楽の発電が巻き起こる。

鬼灯の白い身体が何度もくねり、のけ反って、甘い汗を空中に散らせる。

（いけない、これは感じすぎる、し、しっかりしないと・・・）

「うっ・・・ふぁ、あぁぁあっ、あっ！あぁああ・・・っ」

しかし鬼灯の理性は、襲い来る快感の悦波に耐えられず一瞬で流され、無機質な器具に翻弄される白い身体だけがあるだけだった。

『あらあら、気持ちよさそう～。でも、本番はこれからですよー？』

そう言うと、アデスが仕掛けたらしい怪しげな器具が、鬼灯の最も触れてほしくない部分へと向かう。

羽毛の繊毛を半ばまで生えさせ、竹のようにしなった一本が両足の間に進んでゆく。

（これで、触れられるのか・・・？）

鬼灯の心に、強い拒絶の心と、同じぐらい強烈な快感への期待を感じた。

さきほどの電撃は、鬼灯の性神経だけでなく、快楽に対する抵抗まで薄れさせてしまったようだ。

アデスに知られず生唾を飲み、与えられる刺激をジリジリと待つ。

『ふふん、まだ罰は続けますよ～。覚悟してくださいねっ！ホオズキさん！』

明るい調子のアデスの声がボックスの中で響き、そのスピーカーの振動すら肌を震わせて僅かな愉悦を感じてしまう。

「な、何が罰かっ・・・ひあっ！」

鬼灯が反抗の言葉を上げた直後、繊毛が自身を根元から先端に向かって撫で上げた。

その瞬間、腰にキュンと切ない愉悦が走り、鬼灯は一瞬の刺激でも絶頂しそうになってしまう。

「はぁ、あぁぁぁ・・・っ！」

大きく息を吐き、下半身を震わせ、なんとか絶頂だけはこらえた。

しかし、一度刺激を受けたそこは次の快感を欲して激しく疼き始める。

「くっ・・・うぅ、とっとと止めをさしなさいっ・・・！」

『あらあら～？それは、はやくイカせてーってことですか？おかしいなあ、さっきの電撃は、そこまで強力ではなかったはずですけれど～？』

わざととぼけるアデスの口調にカッと怒りが湧く。しかし、再び繊毛にスルリと撫で上げられて、怒りは霧散した。

「あああっ！」

鬼灯の上半身がのけ反り、下半身が突き上げられる。
まるで快感をねだるかのような媚態に、器具は二度、三度と連続して鬼灯自身を撫で上げた。

「んぐぅ、あっああ！はぁ、あぁぁっ！」

軽い触れ合う程度の愛撫で鬼灯は簡単に翻弄され、艶声をあげてしまう。
たったこれだけの愛撫で鬼灯自身は濡れそぼり、絶頂を求めて淫らな液を零し続けた。

『ふふ～ん、こっちをお忘れじゃないですか～？』

アデスの言葉の直後、おろそかになっていた上半身への愛撫が再開される。

T字モップに容赦なく胸の突起ごと胸板を大胆に擦られ、上半身に泣き出しそうなほど熱い快感がこみ上げてくる。

「あああっ！ぅあ、はぁぁっ！あっ！あっ！やめっ！うあぁぁああっ！」

上半身が打ち上げられた魚のようにビクビクと激しく痙攣する。
柔らかい繊毛が性感帯を刺激するたびに、我慢できないほどの愉悦がこみ上げ、鬼灯の思考を混乱させてゆく。

（感じすぎる、これはいけない、あぁぁ・・・っ意識が、うぅっ・・・！流され・・・）

羽毛のような繊毛で耳からうなじを撫でられ、たったそれだけで快感が背筋をつたい、腰や足の指先にまで伝わってゆく。
そして到達した先でも愛撫責めを受け、快感の奔流は弾き返され、行き場がなくなった快感がただただ身体中で渦巻き続けてゆく。

「ひっ！ぐぅ・・・っ！」

鬼灯らしくない切羽詰まった嬌声を上げ、下半身を痙攣させる。
繊毛が再び自身をしゅるりと撫であげ、刺激を与えた。
繊毛が去った後も鬼灯の腰はガクガクと震え、さらに上下に腰をゆすり、快感を欲して、驚くほど淫らな仕草をしてしまう。

何度も刺激を受け、鬼灯の最も敏感な性感帯は極限状態を迎えかけている。
どんどん上がる絶頂への欲求に、期待させる身体中の愛撫、時折思い出したように与えられる溶けるような甘い刺激に、鬼灯は無意識に腰を軽く上下に波打たせ、淫らな様を見せていた。

『あらあら～、ホオズキさんてば、腰をカクカクさせて・・・ほんとうにヤラしい人ですね～。そんなにイキたいんですかぁ？』

アデスに指摘されるまで、鬼灯は自分の下半身が無意識に動いているなど知る由もなかった。
ようやく気付かされて、驚愕と激しい羞恥、後悔とともに、身体の動きを止めようとする。しかし・・・

（あっ、な、なぜ、腰が、とまらないっ・・・！こんな、浅ましすぎる行為を、止められない・・・！）

鬼灯が混乱している最中、再び繊毛に自身を撫で上げられ、鬼灯は切なげな快楽の声をあげた。

「あぁぁぁっ・・・」

その声はこれまでのものとは違い、拒絶ではなく、享受、媚の入りまじった声色だった。
そして、アデスがそれを見逃すはずはない。

『あらまあ・・・きもちよさそうですね、ホオズキさん・・・そんなエロい声出しちゃって・・・もっとしてほしいですか？』

（して欲しい）

ドクン、と鬼灯の心臓が高鳴り、アデスの質問に対して瞬間的に浮き上がってきた願望が叫びを上げる。

（な、何を馬鹿なっ・・・！）

すぐに理性で先ほどの妄念を打ち消すが、もう鬼灯には、なぜ自分が快感に抗っているのか理由すらわからない。

自身以外の身体中を様々な器具で愛撫され続け、一際敏感になった身体がジリジリと甘い快感を飲みほし続けている。
鬼灯の鋭い眼光かは呆とトロけ、吊りあがっている眉はハの字に垂れ、口端からは淫らな唾液がこぼれようとしている。

「あっ・・・あっ・・・ぁぁ、あぁぁ・・・っ」

筆のような繊毛で右胸の突起を素早く撫で擦られ、一気に迫る胸絶頂に、鬼灯が切なげな声をあげる。

『どうです？こんなふうに、アソコも愛撫してほしいですか？』

（こんな、ふうに・・・？）

胸に施される筆愛撫の感覚が、疑似感覚となって自身を追い詰めてゆく。
しっとりした筆の柔らかい感触が自身をはい回る様を想像してしまい、鬼灯は知らず腰に力を込めてしまっていた。

自分の想像で自らを追い詰め、鬼灯の身体はすでに鬼灯の意思から離れて、快感を貪る華蜜の身体へと変貌し始めている。

そして、鬼灯の臀部、白い双丘の間に棒状の繊毛器具が押し当てられ、一気に先を突いた。

「うぁぁっ！そこは、だめだっ・・・！」

未だ責められていないもう一つの性感帯への刺激に気を取られた隙に、再び羽毛が自身を撫で上げた。

「はぐぅぅっ・・・・！うぁっ、あっ、あぁぁ・・・！」

完全に反応しきった自身の先端から、とめどなく淫液が零れ落ちている。

※続きは製品版でお楽しみください※